臨床心理専門職大学院　紀要　2015年，第5号，91-99.
Psychologist, 2015, No.5, 91-99.
〔投稿論文〕

初学者が抱くパーソン・センタード・セラピーのイメージ
―教育・訓練への示唆を求めて―

How Person-Centered Therapy is Perceived by Beginning Therapists: Searching for Better Training Methods

斧原　藍
関西医科大学附属滝井病院

白﨑愛里
近畿大学医学部附属病院

中西達也
大阪府障がい者就労サポートセンター

中田行重
関西大学臨床心理専門職大学院

Ai ONOHARA
Department of Neuropsychiatry, Kansai Medical University

Airi SHIRASAKI
Kinki University Hospital, Faculty of Medicine

Tatsuya NAKANISHI
Osaka-fu Shogaisha Shuro Support Center

Yukishige NAKATA
Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University

◆要約◆

パーソン・センタード・セラピー（PCT）は他の学派、特に認知行動療法などと異なり、それぞれのセラピストが個人としての genuine な関わりを行い、定式化されたあり方がないため、初学者は学びにくい。加えて、PCT にとって重要な中核条件（Rogers 1957, 1959）は内的な体験（Bozarth 1997）であるために、そこに到達するためにどんな努力をすればよいか分かりにくい。PCT が初学者にどのように感じられ、理解され、どのようなイメージを持たれているのか、を知ることは今後の初学者の教育・訓練を考える上で意味があると思われる。それはまた、初学者に

著者連絡先　Corresponding email address: nakata.gm@gmail.com

とっての困難を知るだけでなく、PCT の理論の中で十分に展開されてこなかった領域を浮かび上がらせる可能性さえある。本研究はインタビューを通して初学者の PCT に対するイメージ等を調査し、その教育や理論について示唆を得ることを目的とする。

キーワード：パーソン・センタード・セラピー、初学者、イメージ、訓練

Abstract

It is not easy, particularly for beginning therapists, to learn Person-Centered Therapy (PCT), because it requires practitioners to relate to clients as genuine persons and, consequently, does not have fixed ways of functioning as therapists, in contrast to other orientations, especially Cognitive-Behavioral Therapy. In addition, it makes it difficult to learn how to reach the core conditions (Rogers, 1957, 1959), which are essentially "internal experiences" (Bozarth, 1997). It seems important to examine how PCT is perceived, understood, and felt by beginning therapists in order to get ideas on education for beginners. Such examinations may illuminate the unexplored fields of PCT theories. The study aims to examine the perception of PCT by beginning therapists and to come up with better training methods for them.

Key Words: Person-Centered Therapy, beginning therapists, perception, training

問題と目的

中田（2013a）はパーソン・センタード・セラピー（Person-Centered Therapy 以後 PCT）が西欧において認知行動療法（Cognitive Behavioral Therapy 以後 CBT）との苦しい“戦い”を強いられている状況を踏まえ、我が国の PCT の課題の一つに訓練のあり方の探求を挙げている。例えば、PCT の代名詞のように言われる中核条件（Rogers 1957, 1959）はリフレクション（reflection）などの言語的応答であるかのように誤解されがちであるが、本来は内的な体験である（Bozarth 1997）ことを考えると、その内的体験に到達するためにどのような努力や訓練をすべきかを探求することが必要であると述べている。訓練のあり方の探求が必要な理由の一つに、“PCT は教え難い”、という面があることが考えられる。例えば、中田（2013b）が、共感的理解のために内面で何をすればよいか初学者は分からないので内的な努力の仕方を探る必要があると述べ、その具体的な内的努力を提示しているのも、そのような事情に依る。

PCT はその個々の Th（Therapist 以後 Th）の人間性が大きく関わるので、固定化した訓練だけで事足りる訳ではないにしろ、Nakata（2014）も述べているが、プロの音楽家が個性的な演奏をするようになる過程で繰り返しエチュードをおさらいするように、ある種の体系化された訓練方法が必要であろう。その際、初学者が PCT にどのようなイメージを持ち、どう理解しているのか、理論、実践においてどのような難しさを抱えているかを知っていることで、より意味のある訓練方法を開発することが出来るのではないだろうか。そこから、例えば、経験を積んだ Th にとっては当たり前のことであっても、初学者にとっては理解や実践が難しいというような点が発見できるかもしれない。あるいは、PCT の理論的枠組みの盲点というべきもの、すなわち、経験者には経験から分かっていても、理論には記述されていないことが見えてくる可能性さえあると思われる。

ところが、初学者が PCT にどのようなイメージを持ち、どのような難しさを抱えているのか、これまで調査されたことはなかった。本稿

は、初学者である大学院生を、PCTを軸とする群と、PCTの中でもフォーカシング指向心理療法（Focusing-Oriented Therapy 以後FOT）を軸とする群、まだ軸とする学派が定まっていない（以後Non-ID）群の3つの群に分けて、PCTについてのイメージや理解、難しさ等についてインタビューを行い、その教育や理論について示唆を得ようとするものである。なお、研究協力者をPCTを軸とする初学者に限定せず、軸となる学派が定まっていない者も含めたのは、PCT内部と外部の両方からPCTのイメージを捉えることに意義があると考えられたからである。

また、PCTを学ぶ機会はあっても、全員が、PCTをどのように捉えているかを普段から意識しているとは考えにくく、調査者と対話することで、PCTに対する考えや認識を改めて深く追及しながら回答できると考えられたため、半構造化面接を用いることとした。

なお、研究協力者は全員、同じ大学院に所属している。言うまでもなく、彼／彼女らが初学者全般を代表するものではない。その意味で得られた結果の一般性に限界はある。しかし、筆者らは初学者全般が持つPCTへのイメージの平均値を得ることよりも、ここで得られた示唆をもとに今後のPCTの訓練や発展を考えることこそ重要と考えている。

方法

研究協力者：　臨床心理士養成のためのA大学大学院に所属する修士課程2年次生30名を対象に、自分がアイデンティファイする学派（インタビューでは“学派”あるいは“軸”という語を用いる）について質問紙調査を行い、同時にインタビューの協力者を募った。10名からの回答を得た結果、自分がアイデンティファイする学派をPCTだと答えた者が4名、FOTが2名、「悩み中」あるいは「特になし」と答えた者（Non-ID）が3名、構成主義が1名であった。その中で、インタビューに協力しても良いと答えたのは、PCTを選んだ者が3名、FOTが2名、Non-IDが3名の、計8名であったが、FOTが2名だったことから、PCTとNon-IDも同様に2名ずつを抽出して（以下、FOT群、PCT群、Non-ID群とする）、計6名にインタビューを行った。

実施手続き：　調査は2013年11月から12月に、大学構内の比較的静かな部屋で実施した。調査実施時間は一人約60分程度であった。インタビューは協力者の許可を得てICレコーダーに録音した。リサーチクエスチョンの精緻化を目的に、予備調査を実施し、その結果、以下の6項目が主要な質問項目となった。ⅰ）自身のアイデンティファイする学派（軸）について、ⅱ）PCTのイメージまたは理解について、ⅲ）中核3条件（以後、3条件）のイメージまたは理解について、ⅳ）カウンセリングを行う上で困っていることまたは悩んでいること、ⅴ）カウンセリングを行う上で自身に不足していること、ⅵ）自身がその学派（軸）をアイデンティファイすることで、あるいは学派（軸）を持たないことで困っていること。

倫理的配慮：　インタビュー開始前に、個人情報の保護、調査参加は強制でないこと、調査で得た情報は研究目的以外には使用しないことを説明し、調査参加と録音の同意を得た。

分析手続き：　インタビュー録音データをもとに、個人を特定する情報を削除した逐語録を作成した。自由度の高い面接であったので、語りの内容が質問項目からずれることがあったため、語られた内容を改めて質問項目ごとに集約し直し、分析資料とした。分析は以下の手順で行った。ⅰ）筆者4名が調査者として分析にあたった。各調査者は各々で分析資料を読み込み、群内で共通している部分を抽出すると共に、共通していない部分は個人特有の発言として抽出した。ⅱ）各調査者が抽出したデータをもとに、4名で合議を重ね、群内で共通する発言と、個人特有の発言を最終的に決定した。ⅲ）それをTable 1～3にまとめ、各調査者ごとに、群間

の違いや全体の共通性を見出す作業を行った。iv）再び合議を重ね、最終的な群間の違いや全体の共通性を決定した。

結果と考察

各群の共通性や個人特有の発言を、質問項目のカテゴリーごとに表1～3に示した。以下、丸で囲まれた数字（例、②35、の下線部分）は研究協力者を表し、丸で囲まれた後に続く、丸で囲まれていない数字（例、②35、の下線部分）はインタビューの発言を意味単位で区切り、それらに発言順に割り振った番号である。

以下に、各質問項目から見出した特徴を、カテゴリーごとに記述した。なお、PCTのイメージを問うたところ、6人全員が3条件について言及し、また“PCTイメージ”と“3条件イメージ”の問いで、似たような回答をする場面もいくつか見られたので、“PCTイメージ”と“3条件イメージ”を同一のカテゴリーとして記述していくこととした。

軸について

事前調査をしていたものの、FOT群では、自分の軸がPCTなのかFOTなのかで迷う様子が見られた（FOT③④冒頭部分）。これは、彼らがFOTをPCTの中の一つと捉えているためと推察される。

PCTイメージおよび中核3条件イメージについて

特徴として見出せるものが多く、便宜上大きく4つにわけて記述する。

1）ベースとしての3条件（Non-ID群、FOT群）：Non-ID群は以下の語りにみられるように、3条件をどの流派でもベースとなるものだと捉え、見立てとカウンセリングを分けて考えていた。Non-ID⑤は“その他”の項目で「見立ては精神分析、態度はPCT」（Non-ID⑤9）と述べており、Non-ID⑥は“PCTイメージ”の項目で「PCTはクライエント（Client

Table 1　PCT群

	共通性	①のみにみられること	②のみにみられること
学派（軸）		PCTは意識している（①2）	軸はPCTだが、ClによってはCBT的アプローチを取り入れることもある（②1）
PCTイメージおよび中核3条件イメージ	・PCTのイメージを問われて（3条件を尋ねる前に）6条件について言及する（①6：②9）	PCTの習得は悟り・禅のよう（①7，13）	・Clが有機体として開かれより良く生きる方向に開かれていくことが最終目標（②10，13）
	・Clの中に答えがあり（実現傾向）、それを見つけられるように促すのがPCTの治療観（①6，9：②10）	・個々人のPCT理論があるが、共通する何かはあるように感じる（①7～9，13）	・Thが自分を感じつつClを理解しようとすることで、Clは自分に目を向け、体験が促進されることに繋がる（②9，10，13）
		・第三者が見てわかる客観的なものがPCAにはない（①7）	・PCTの効果は生き方に関わる根本的なところであって、即効性はない（②99）
	・自己一致と共感をセットにして語る（①17，24，41　②9，10）	・6条件はThが持つべき態度（①6，7）	共感的理解と自己一致の方が不安多く、内的な作業として意識している（②24，25，29，33，50）
	・無条件の肯定的関心への意識が他2条件に比べて薄い（①42，49　②24，25，29，33，49，50，54）	・6条件の意味を理解するには体験するしかない（①13）	Thの自己が感じていることを深めること（自己一致）はClの体験を理解しようとする（共感的理解）ためのセンサーになる（②10）
	・体験の重視（①59　②60，68）	共：相手の中に入っていくThの部分（①17）	共感と自己一致を分けて考えたくない（②29，34，45）
	共：共感的理解とは相手の体験過程をできるだけそのまま理解しようとする努力（①17，24，41，49：②9，51）	自：自分の中に残ったThの部分（①17）	共感・自己一致ができてるなら、無条件の肯定的関心はできている（②50）
	無：Thの価値観を抜きにしてClの話を聴く（①20，24，51：②37）	無：無条件に肯定的に配慮を向けることで、Clが自分の体験に自信を持てるように促す（①19，20）	無：Thの理解があっているか照合する作業自体に無条件の肯定的関心が同時に流れている（②45）
	自：相手の体験過程を体験できているかを確認する努力（①24，29，35，49：②45）	無：結構大事（①20）	
		自：自分の中にある体験過程（①17，24，29，35，41，49，51）	
カウンセリングについて困っていること		・相手を本当に理解できているのかなぁと思う（①76）	・CBTをセラピーに取り入れているとき、セラピストの在り方がCBTとPCTに分かれるようでうまく統合できないと感じることがある（②86）
		・カウンセリング効果あったのかなと思う（①78）	何かしなければいけない、と思ってしまう自分（②87，88，105）
自分の不足点		・双方の体験過程を理解しようと努力しながら聴く練習が不足（①96，97）	・自分の不安解消のために、CBTが光ってみえて飛びつきそうになる自分（CBTは何かやってる感がある）②88，96～98，104，105）
		・PCTに関する勉強と経験が不足（①98）	・語彙力の不足（不足なりに伝えればそれで良いかもとも思う）（②107）
学派（軸）に関して困っていること	・PCTをオリエンテーションにすることで、何かしらの不安を感じる。（2人に重なる不安の部分もあるし、違う部分もある）（①76～91：②96）	・自分の体験過程を相手に伝えるかで悩む（①77，82，85）	・自信が持てなくなるときがある。（②97，98）
		・本当にPCAで良いのか（①88，90，91）	

Table 2　FOT 群

	共通性	③のみにみられたこと	④のみにみられたこと
学派（軸）	・傾聴がベースであり、フォーカシング的な応答は必要があれば適宜用いる（③2，6，93：④9，10） ・フォーカシングは誰にでも使うのではなく、Ｃｌに合わせて使うか判断する。（③6：④9） ・フォーカシングはＰＣＡの中の一つ。（③は発展形ととらえている）（③41：④3）		
ＰＣＴイメージおよび中核3条件イメージ	・3条件。（③39：④11） ・技法という認識はない（③7，9，43：④11） ・PCT は Cl の主体性を支える（③39：④11） ・Th が感じていることを Cl に「伝えること」が、Cl にとって大事（③22：④20，44） ・（3条件は）技法ではなく態度である（③37：④11） ・無条件の肯定的関心と共感的理解をセットにして語る（③22，26，27　④12，16） ・3条件を台詞にして説明（③31　④44） ・自己一致のことを一番語る（③50周辺：　④16～20）	・非指示的療法（③9） ・不安定の中寄り添ってくれる（③19） ・Th，Cl の交流・人間と人間のぶつかりあい（③7，9，107） ・非日常としての面接場面を成立させるためには、ＰＣＡ的アプローチが必要（③39） ・ThCl の枠にはめないので見立てや治療方針は立ちにくい（③15，16） ・共感的理解と無条件の肯定的関心はセット（③27） ・リフレクションは共感的理解であり無条件の肯定的関心でもある（③26，31） ・3条件にはこだわらないようにしてる。（③21）	・技法というよりも態度を重視（④11） ・自己一致はおろそかにされているイメージ（④12）
カウンセリングについて困っていること	（人と人との）交流ができているかという不安（③82：④39）	・向き合えてるのかどうか（③82）	・ついていくことに必死で流されてしまう（④32） ・感じていることをうまく言語化できない（④32）→だから相互作用がないのかも（④39）
自分の不足点		・肩の力を抜くこと（抜けていない）（③92）	・得た知識をどうやってケースに活かせばよいのか（④38） ・全部。実践力も経験も。（④35） 特に発信力（④35） 知識（④36） 考える力（④38） 言うならば人間力（④37）
学派（軸）に関して困っていること	フェルトセンスにこだわってしまう（③99：④40，41，42，44）	・いろんな学派の理論を、フォーカシングと絡めて勉強したい。（③99，103）	

Table 3　NON 群

	共通性	⑤のみにみられたこと	⑥のみにみられたこと
学派（軸）		・全部学んだわけじゃないからまだ決められない（⑤3）	・何を持って PCT かがわからないから、自分の軸がよくわからない（⑥4，14） ・いろんな学派をかいつまんでいる感じ（⑥11，12）
ＰＣＴイメージおよび中核3条件イメージ	・何を持って学派を PCT といえるのかよくわからない（⑤17：⑥4） ・PCT（3条件）は全部の心理療法のベースである（⑤32：⑥7） ・3条件はどの流派も用いるもの（⑤32：⑥9，20，30） ・自己一致、受容、共感はつながっている（⑤28，29：⑥S15） ・共感は追体験だ（⑤22：⑥16） ・自己一致のみ単独で語り、共感と受容はセットで語る（⑤22，28，29：⑥17，36，40） ・「同じ人間でないので、完全にはわからない」ことを強調する（⑤22，27～29：⑥15，16，）	・ひたすら聴く（⑤15） ・自己一致はよくわからない（⑤22）	・自己治癒力や成長力を期待する（⑥3） ・PCT は技法（⑥25） ・Cl の目の前にいて用いる学派と、Cl がいないときに解釈する学派が別（⑥25，26） ・自己一致を一番意識している（⑥43） ・無条件の肯定的関心を「肯定」と表現する（⑥19） ・共感的理解と無条件の肯定的関心も、自分の感情や気持ちは関係ない（⑥40，19） ・共感と無条件の肯定的関心がよくわからない。違いもよくわからない（⑥36）
カウンセリングについて困っていること		・本当に Cl のためになっているのか、意味あるのか、これで良かったのかと思う（⑤61）	・軸がないから見立てやかかわりに自信が持てない（⑥53）
自分の不足点	・理論的知識（⑤68：⑥56）		・良いタイミングで応答がはさめない（⑥55）
学派（軸）に関して困っていること		・軸を決めなくてもよいのではないかと思っている一方で軸を決めなアカンなとも思っている（⑤79） ・どの学派も網羅していない→広い知識の中でいろんな方面から、Cl に合わせて選択できるとよい（⑤79）	・軸を絞る必要性が理解できない（⑥57～60）
その他	・軸を決めないといけないのかという疑問（⑤79：⑥57～60）	・見立ては精神分析で態度は PCA（⑤9，10） ・リフレクションは流派関係なくカウンセラーとしての基本。技術。（⑤90～92）	・PCT とその他心理療法の境目がわからない（⑥6） ・学派の違いは見立ての段階で生じる（⑥7）

以後Cl）の目の前で発揮されるものである」「Clの前で用いる時の学派と、Clがおらず解釈するときの学派が別」（共にNon-ID⑥25）と述べている。ここから、Non-ID群はPCTを、見立てなどClを理解する論理に乏しいとみている可能性が示唆される。また、Non-ID群が見立てのために他学派を取り入れるという対処を行っている一方で、FOT④やPCT群は見立ての話をほとんど出すことがなかった。このことから、Non-ID群は他群と比較して見立ての必要性を特に意識しているとも考えられる。

FOT群でもNon-ID群同様、3条件がカウンセリングのベースであり、そこにフォーカシングの要素を取り入れていることが語られた（FOT③2，6，93；④9，10）。これはNon-ID群との共通性とも考えられるが、FOT群がFOTをPCTの中の一つと捉えている点（FOT③41；④3）で、異なる学派を折衷しているNon-ID群とは質が異なると考えられる。

2）3条件の語り方の違い（PCT群、FOT群）：PCT群は3条件を台詞で語ることがなかったがFOT群、Non-ID群は各3条件を語るのに、具体的なThの台詞を用いた。例えば、共感的理解のイメージを問うと「（Th.の応答でいうと）そんな風に思われてるんですね」（FOT④44）というイメージ、無条件の肯定的理解を問うと「（Th.の応答でいうと）確かにそう思いますよね」（Non-ID⑥41）というイメージを持っていることが語られた。

PCT群が台詞を用いなかったことには、内的な体験を重視する点が影響していると考えられる。PCT群は「内的な体験」に関する語りが多く、3条件を語る際にも、「相手の中に入っていく」や「自分の中にある体験過程」（共にPCT①17）など、内的な体験として詳述する様子が見られた。つまり、Bozarth（1997）が「治療的変化をもたらすためのTh側の条件はすべて内的で主観的体験である」と述べるように、3条件を内的で主観的なものとして捉えているために、台詞で表すという発想に至らなかったと考えられる。

FOT群は、3条件の語りに台詞を用いたことに加え、「自己一致して感じていることを相手に伝えるっていうことが、相手にとっても大事」（FOT④20）のように言語的応答を重視する様子が見られた。FOTの創始者であるGendlinは、感じられた意味を言語的に象徴化することにより新たな意味が創造されていくことを指摘しており（1993，1999など）、言語的応答を重視するFOT群の3条件理解に影響しているものと考えられる。

3）3条件のつながり方を言及するときの違い：どの群も共通して3条件間の繋がりに言及していた。

自己一致と共感的理解をセットにして語る（PCT）：PCT群は、共感的理解を相手の体験過程をできるだけそのまま理解しようとする努力と捉えており（PCT①17，24，41，49；②9，54）、それができているかどうかの確認プロセスを自己一致と捉えていた（PCT①24，25，35，49；②54）。そのため、共感的理解と自己一致がセットになったと考えられる。

無条件の肯定的関心と共感的理解をセットにして語る（FOT群、Non-ID群）：FOT群・Non-ID群の無条件の肯定的関心と共感的理解をセットにする語り（Non-ID⑤-22，28，29；⑥-17，19，36：FOT③22，26，27，50；⑥12，16～20）は、2条件間に共通性があるというよりもむしろ、これら2つの条件と自己一致の間に生じうる矛盾を彼らが感じているために表れたものではないだろうか。たとえば、「共感的に相手を理解するってところと、無条件の肯定的関心が大事ってところはなんかしっくりくるもんがあったけど。Thも一致してて、なおかつその、一致してる感じっていうのも（中略）ありうるんだろうかっていう不思議。」というように、これらの矛盾

による困惑が見て取れる。

カウンセリングについて困っていること

FOT群は、カウンセリングについて困っていることで「(人と人との) 交流ができているかという不安」(FOT③82；④39) を挙げている。FOT群の記録から推察するにこの交流とは、Clの発言に応じるThの言語的応答を指しており、上記同様、言語的応答を重視しているがゆえの、FOT群に特徴的な悩みと考えられる。

自分の不足点

6人全員の共通点として「知識」が挙げられた。これは、初学者という共通性によるものであろう。

学派（軸）に関して困っていること

PCT群では、困りごとの共通性として、PCTをオリエンテーションとすることを良しとしつつも、何かしらの不安感を持つことが見出された。PCT①は院生の間に軸を決めてしまうことによる不安を語り（PCT①88～91)、PCT②はCBTと比較してPCTが即効性のある学派でないことによる不安を語った（PCT②88～107)。

FOT群は、フェルトセンスに拘ることを困りごととして挙げた（FOT③99；④40～44)。FOTの中心概念であるフェルトセンスに注目できることは、FOT群として自然なことであり、むしろThとしての自信に繋がりそうに思えるのにもかかわらず、それが困りごととして語られたのはなぜであろうか。本人らからは語られなかったが、次の3点が推察される。1) FOTは心理療法に導入しにくいという語り（FOT③4, 5) から、フェルトセンスを取り上げることだけではカウンセリングが成り立たないと感じているのかもしれない。2) フェルトセンスにとらわれてしまい、ラポール形成がされてないのにClのフェルトセンスを訊いたり（FOT③99)、自分の感じを伝えるのに焦ったり（FOT③99) するという語りから、フェルトセンスに目が行きがちなあまり、他の重要な要素を見落としてしまうと感じているのかもしれない。3)「～な感じ」を決まり文句的に使ってしまうという語り（FOT④40, 41) から、マニュアル化された技法のようにFOTを用いることに危険性を感じているのかもしれない。

Non-ID群では、共通して、軸を持たないことによる不安（Non-ID⑥53) や軸を持った方が良いと感じているところを挙げつつも、同時に軸を決める理由が分からない旨を語り（Non-ID⑤79)、学派（軸）選択に対する葛藤が生じていることが示唆された。

総合考察

『軸について』では、FOT群は「自分はPCTなのかFOTなのか」という迷いを抱いていた。『PCTイメージおよび中核3条件について』では、FOT群とNon-ID群は、3条件のことをどの流派でもベースとなるものだと捉えていた。また、3条件を捉える際に重視していることや、各条件間の関連の捉え方に、各群間で違いが見られた。『カウンセリングについて困っていること』では、FOT群は、「人と人との交流ができているのか不安」という悩みを抱えていた。PCT群は、何か相手のためにしてあげなければならないと思ったり、カウンセリングの効果があるのかと不安になったりすることがあった。Non-ID群は理論的知識の不足や応答のタイミングなどで困難を感じていた。『自分の不足点』では、6名全員が知識不足を挙げた。『学派（軸）に関して困っていること』では、PCT群は、各々内容は違えど、2名ともがPCTを軸とすることへの不安感を語った。FOT群は、フェルトセンスにこだわり過ぎてしまうことを挙げた。Non-ID群は、軸を持たない不安を語ると同時に、今軸を決めなければならない理由が分からないと語り、葛藤が見られた。以上の結果をもとに、ここからは、訓練・教育および理論等への示唆を展開していきたい。

まず、Non-ID群の、Clの前で用いる時の学派がPCTで、Clがおらず解釈するときの学派

は精神分析、という捉え方がクリアになった。これはNon-ID群の初学者にとってPCTがCl理解の枠組みを提供していないと映ることによるものであろう。PCTにも過程概念（Rogers 1958）というClの変化の進展具合を見る枠組みがあるが、その一つであった体験過程だけが発展し、それ以外は殆ど議論されていないこともあって、PCTには理解の枠組みがない、と考えられているのであろう。その点、抑圧や転移をはじめとする精神分析の概念は、Clの無意識にアプローチしようとするTh側のみが持つ専門的な概念であり、不安定な初学者には、専門家気分を持たせてくれる、魅力的なものと映るのかもしれない。

この折衷的な態度については今後の議論を待ちたいが、PCTの訓練・教育のあり方という本論の趣旨にそって考えておきたい。PCTでは、“Clの私的世界をそれが自分自身の世界であるかのように感じ取”（Rogers 1957）ろうとするものであるから、ThのCl理解とは精神分析のようにClの持たない専有物の概念で理解することではなく、Clが感じ理解しているままに理解することである。理想的にはClの理解とThのそれとは別のものになるどころか、限りなく近似していくことになる。このことは、ここにあげたRogersの古典的論文を読めばすぐに分かることである。今後の教育では、このCl理解の枠組みを強調する必要がある。ただし、Cl理解とTh理解が近似する、と教育しても、それでも不安になる初学者はいるだろう。「Clと同じ理解をするだけで専門家と言えるのか？」という声が上がるだろう。「専門家」とは相談者（Cl）と違う知識や技能を持っている、という観念があるので、そのような声が上がるのは当然である。

そこで、PCTの教育としては次のことを考えておかなければならない。まず、Th理解がCl理解に近似することで、具体的にどんなClの変化を導くのかについての研究を積み重ねる必要がある。やはり、実際にClにどのくらい役に立っているのかが感じられないと、その気になれないだろう。加えて、「Clと同じ理解をするだけで～」という言い方についてである。これは共感的理解のことを指しており、内的な努力が必要（中田 2013b）なものであるが、それに到達することは至難であることを強調する必要がある。

それに関連して、FOT群、Non-ID群が3条件を台詞で捉えているが、それはPCTの3条件が内的な体験であると明確に意識されてこなかったことの表れであり、そこに至ったのは教育上の問題であろう。その根本にはわが国の臨床心理士や産業カウンセラーの業務における、いわゆる「傾聴」や「支持的カウンセリング」と、PCTの3条件によるカウンセリングとの区別がつかなくなっているという事情がある。「傾聴」や「支持的カウンセリング」も相当に幅が広く、具体的にきちんとした輪郭を備えていない。「傾聴」や「PCT」概念が混沌としているのはそのためである。従って、少なくとも中田（2013a）が述べているように、PCTの傾聴が他のいわゆる傾聴とどう違うのかを内的努力という視点を中心に 明確にする必要がある。そして、先にも述べたが、その「PCT固有の傾聴」によってClに何が起こるのか、ということを研究、教育していくことが重要である。

3条件間の関連について群間で違いがあるのは、興味深い。中核条件間の関連についてはPCTの研究者やtribe間でも違いがあり、盛んに議論されている。本研究で得られた違いは、解決すべき問題というよりも、今後の理論的展開のための重要な論点が初学者の見方にも反映したものと言えるであろう。

これだけ多くの学派についての情報が溢れている時代、一つを決めることは大変難しいであろうし、これには個人の成長としてのアイデンティティの確立のテーマも含まれているであろう。学派アイデンティティを持たない、というのもアイデンティティの一つとなり得るものである。初学者が学派選択でどのような選択をす

るにしても、少なくとも、上に記したような教育や理論、研究の展開とその情報提供をして、その上で判断出来るようにすることがPCTの立場として必要であろう。

文　献

Bozarth, J. D. (1997). Empathy from the framework of Client-Centered Theory and the Rogerian Hypothesis. In Bohart, A. C. & Greenberg, L. S. (Eds.) *Empathy Reconsidered*, (pp. 81-102), American Psychological Association; Washington, D. C.

Nakata, Y. (2014). Internal Actions for Empathic Understanding through Bodily-Affective Mode of Sensing, *Person-Centered & Experiential Psychotherapies*, 13(1), 60-70.

中田行重（2013a）わが国のパーソン・センタード・セラピーの立場として取り組むべきこと、人間性心理学会第32回大会（大正大学、9月14-16日　論文集150-151.）

中田行重（2013b）Rogersの中核条件に向けてのセラピストの内的努力　共感的理解を中心に『心理臨床学研究』30(6)：865-876.

Rogers, C. R. (1957) The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change, *Journal of Consulting Psychology*, 21(2): 95-103. カーシェンバウム・ヘンダーソン編（2001）：『ロジャーズ選集（上）』伊藤博・村山正治監訳，誠信書房　pp. 152-161.

Rogers, C. R. (1958) A Process Conception of Psychotherapy. *American Psychologist*, 13: 142-149.

Rogers, C. R. (1959) A Theory of Therapy, Personality and Interpersonal Relationships as Developed in the Client-Centered Framework. In S. Koch (Ed.) *Psychology: A Study of a Science, 3. Formulations of The Person and the Social Context.* New York; McGraw Hill. カーシェンバウム・ヘンダーソン編（2001）：『ロジャーズ選集（上）』伊藤博・村山正治監訳，誠信書房　pp. 152-161.